

脳の機能解剖と画像診断

第2版

Heinrich Lanfermann, Peter Raab, Hans-Joachim Kretschmann, Wolfgang Weinrich【原著】

真柳佳昭, 渡辺英寿【訳】

評者

新井 一

順天堂大学／学長・脳神経外科

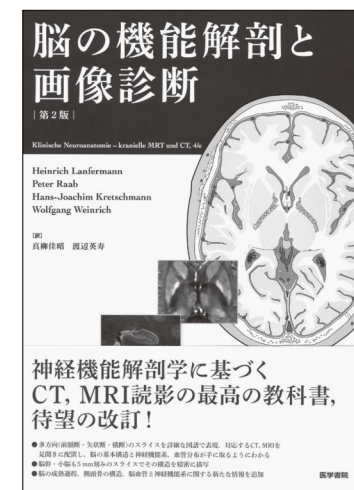
このたび、『脳の機能解剖と画像診断 第2版』が出版される運びとなった。本書は、ハノーファー医科大学の Kretschmann 教授、Weinrich 教授らによる原著の邦訳であるが、その最初は『[日本語訳] CT 診断のための脳解剖と機能系』（1986年）に遡ることができる。画像診断の進歩に伴い『[日本語訳] 画像診断のための脳解剖と機能系』（1995年）、『[日本語訳] 脳の機能解剖と画像診断 初版』（2008年）と続編が出版されてきたが、いずれも世界そして本邦において高い評価を受けている。実際のところ、私どもの施設の脳神経外科の医局や神経放射線科の読影室の書籍棚には、表紙の磨り減ったこれらの図書が鎮座しており、今回の『脳の機能解剖と画像診断 第2版』も同様の運命をたどることになると思われる。

本書の特徴は、MRI・CT 画像と図譜との絶妙なコンビネーションであり、これが読者を魅了する。冠状断と矢状断は MRI-T₁・T₂ 強調画像と図譜に続いて骨条件の CT 画像、水平断については MRI-T₂ 強調画像と図譜、そして脳およ

び骨条件の CT 画像が示されている。その後、脳幹、錐体骨に焦点を絞った画像が呈示され、脳室、動脈、静脈の画像・図譜が続くことになる。特に、動脈についてのコンピューターグラフィクスは出色であるし、図譜を用いた動脈の支配領域に関する解説は臨床家にとっては極めて有用である。そのほか、拡散強調画像による白質内線維束の描出、新生児・乳児から幼児に至る髄鞘化の変容、顔面頭蓋・頭頸移行部の図譜による解説、そして神経伝導路の詳細な局在表示など、大変に盛りだくさんの内容になっている。

本書を通読して感じることは、脳という今も昔も変わらぬ存在を対象にする画像診断、その進歩が私たちに何をもたらしたかである。すなわち、従来は微細な解剖をいかに正確に描出するかが課題であった画像診断が、いつしかその機能にまで立ち入ることになったという事実である。まさに本書の邦訳タイトルにある、「機能解剖と画像診断」がその真髄を表しているように思う。

最後に、記者である真柳佳昭先



生と渡辺英寿先生に心より敬意を表さなくてはならない。お2人は、わが国におけるてんかん外科の大家であるが、極めて多彩な才能をお持ちの脳神経外科医としてもつとに有名である。さて、てんかん外科の手術を考えると、脳実質内の発作焦点を正確に診断し、これを切除するわけであるが、安全かつ確実な手術を行うためには脳の解剖と機能を正しく理解しておく必要がある。その意味からも、真柳先生、渡辺先生は本書の記者として最適任であることは間違いなく、またお2人のフィルターを介して訳された本書の意味するところは極めて大きいように思う。

本書が、脳の機能と解剖を理解しようとする若き学徒に、大きな示唆を与えることを確信している。

A4判・頁552

2018年10月

定価：本体20,000円＋税

[ISBN978-4-260-03551-4]

医学書院刊